

2022 年度 授業改善アンケート集計結果に対する意見  
-社会イノベーション学部

学部長 遠藤健哉

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目について、2022 年度に実施された授業改善アンケートの結果全体に対してコメントを述べたい。

2022 年度授業は、COVID-19 感染防止対策を十分に講じながら、一部の授業科目を除き原則として面接(対面)方式によって実施するという方針のもとで進められた。前年度までの 2 年間、遠隔授業(リアルタイム型、オンデマンド型)を中心に、ハイフレックス授業を含む多様な授業方式での学びを余儀なくされた学生は、学習環境の変化を経験することになった。こうした授業実施体制の変化を踏まえ、2022 年度授業改善アンケートは、2021 年度調査の内容を踏まえつつ、新たな質問項目を設けるといった工夫がなされるとともに、授業時間の一部を活用した対面での回答という選択が可能となった。

授業改善アンケートの集計結果をみると、2022 年度授業は、概ね高い評価を得ており、全体として授業は適切に実施されていたと考えられる。第一に、14 の質問項目(これらの中には履修者の授業への参画や事前・事後学習の状況に関するものも含まれる)のうち11 の質問項目で、5 点尺度において全体の平均値が4点以上(「とてもそう思う」、「そう思う」の合計)となっている。

第二に、授業全般に対する評価を問う項目としての 14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」が 平均値で 4.30 点と高い値を示している。本項目は、昨年度アンケート結果の4.26点(平均値)から上昇している。昨年度まで経験してきた遠隔授業の特徴を活かしつつも、面接(対面)授業のメリットを引き出すことに腐心してきた我々教員ひとり一人にとって安堵できる結果であるといえよう。

次に、授業に対する学生の取り組みに関する質問項目に着目してみたい。項目2「この授業の内容を理解するために努力した」の集計結果をみると、平均値は 4.19 点となっている。当該結果は、学生が 2 年ぶりの面接(対面)授業に懸命に取り組み、新たな授業環境への対応に向けて重ねてきた努力を反映したものと解釈できる。一方、項目11「1回分の授業にあたり、授業時間外の事前・事後学習のために費やした平均時間」に対する回答は、「1時間未満」が72.6%にのぼった。今後、事前・事後の学習をさらに促していくことが必要であろう。

教職員の授業への取り組みに関する調査結果によれば、項目 6「教員は教室内が学習にふさわしい状態に保たれているよう心掛けた」、項目 8「教員は発言・議論等授業参加を積極的に促していた」、さらに項目9「教員から質問への回答や課題の返却・解説等が十分にあった」の平均値は、それぞれ4.37点、3.98点、4.18点となっている。各教員が対面による授業環境の向上に前向きに取り組むとともに、遠隔授業とは異なる形で受講者との双方向のやり取り・コミュニケーションを推し進めたことをうかがわせる結果といえよう。

集計結果には、項目14「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義だった」と他の項目

との相関係数( $r$ )も示されている。項目 14 は、履修者各人の視点からの授業全体に対する総合的評価であるとみなすことができるため、相関分析の結果に着目することは重要であろう。その内容を見ると、授業全体に対する総合的評価は、授業を通じて学生自身が興味や関心を得られたことと強く相関<sup>1</sup>していることはもとより、学生がより良く理解できるように授業を適切に実施することとも比較的強く相関<sup>2</sup>していることが示されている。引き続き、教員は授業の適切な実施に向けて努力を維持していくことが望まれる。

また、本アンケートでは、「授業で用いられた授業手法」と「授業を通じて身についた資質・能力」についての質問も設けられている。「授業で用いられた授業手法」については、「課題(レポート等)」が 70.7%とかなり高い。それ以外にも「グループワーク(24.3%)」、「学生によるコメントペーパー(24.2%)」、「質疑応答(23.0%)」、など多様な授業手法が採用されている状況が示唆されている。「授業を通じて身についた資質・能力」については、その分野の知識・学力のみならず、言語運用能力、論理的思考力、コミュニケーション能力、柔軟な発想力など多様な資質・能力の涵養につながっていることがうかがわれる。

《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目を大学全体の授業科目と比較した場合、「授業で用いられた授業手法」や「授業を通じて身についた資質・能力」として回答された全体的傾向は類似しているが、大学全体より回答割合が高い項目が少なからずある。このことから、《科目開設部門》が社会イノベーション学部である授業科目の特徴として、上記の点についてさらに精査していく必要があると考えられる。

最後に、本学生授業改善アンケートは、実施必須科目の 91.0%、実施任意科目の 66.2%で実施された。また、延べ回答者数に対する各項目における有効回答数は約 93.0%であり、授業に参加していた学生全体の評価を十分に反映した結果であるものと判断できる。ただし、延べ履修者数に対する延べ回答者数は、59.9%にとどまった。2023年度は、一部の授業科目を除き対面(面接)授業を実施するという方針が継続するなかで、告知方法や質問項目を工夫するなど、学生の回答率の向上と授業状況のよりの確な把握に努めることが肝要となろう。

---

<sup>1</sup> 項目 14 「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と項目 12 「この分野への興味・関心が引き起こされた」との相関 ( $r=0.76$ )。

<sup>2</sup> 項目 14 「この授業は総合的に判断して自分にとって有意義であった」と、項目 5 「教員の話し方は明瞭で聞き取りやすかった」との相関 ( $r=0.57$ )、項目 7 「教員の板書・授業資料は見やすかった」との相関 ( $r=0.57$ )、項目 9 「教員から質問への回答や議題の返却・解説等が十分にあった」との相関 ( $r=0.54$ )。